

「貧困の今日的現状と新たな福祉課題を探る」 —派遣村から見た日本社会—

(反貧困ネットワーク事務局長・NPO法人もやい事務局長) 湯 浅 誠

昨日というか、つい先程まで「朝まで生テレビ」に出演しており、皆さんこの時間にいらっしゃるかどうかが、そんなに最後まで見た方は多くないと思いますが、選挙前に貧困の問題で政党に約束をさせたいという企画はわたしのほうから田原さんに持ち込んだのです。何を約束したかったかというと、わたしは去年「反貧困」という本で書きましたが、そこで日本は貧困問題のスタートラインに立っていないということを言っています。それは何かというと、一番端的に現れているのは貧困率の調査をやっていないということなんです。日本の中にどれだけの貧困があるのかということについて、政府としての見解をちゃんと示してないのです。貧困率についてはいろいろ資料があります。OECDが日本の総体的な貧困率、これは世帯の可処分所得で年収238万円を基準にしており、単身世帯だと137万円ということになりますが、そこから推計すると全世帯の13.5%が貧困であるという数字は出ています。あるいは、何人かの学者さんが、いろんなデータを基に日本の貧困はこれだけだというふうなことの試算はされています。

いわゆる先進国といわれる国の多くは、自分の国の貧困というのは、これくらいあるということ、それぞれ出していますが、日本の政府は出していないんですね。OECDの13.5%という数値に対して、「あれは実はこういう理由でちょっと高すぎるんですよ。」と政府は言っています。ちょっと高く出すぎてると。本当はもうちょっと少ないんですよというのですが、ではもうちょっと少ないって幾つなんですかという、その答は

ないんです。

子どもの貧困率についても、OECDのほうでは約14%、という数字が出ています。これについても今年の経済財政諮問会議で、ちょっとこれって高く出すぎてるとですよという資料が配られるわけです。高く出すぎてるといっていますが、実際は幾らなのかというのは言わないんですね。それはずるいということで、それでは政府としては何%と考えるとかということ、まず決めようじゃないかと。それを決めたと上でないと、これは高すぎるのか低すぎるのか、妥当なのか妥当じゃないのか、そういう議論ができないじゃないかということで、その議論の出発点、スタートラインに立ちませんかという話をしていたんです。でもこの間、そういう問題は、あまり注目されませんでした。なぜかという、そういう問題というのは小さい問題で、世の中の大勢に関係ないんだ、ごく一部の人間の話であるということと、あとは食えなくなっちゃって大変だっていうけど、それは本人がもうちょっと頑張って、もうちょっとしっかり勉強して、もうちょっとしっかり仕事して、そういうことをやればいいことで、その人の問題であり、社会の問題じゃないよ。だからおれたちは関係ないということがずっと言われてたからです。しかし、さすがにこの間、かなり雰囲気が変わってきました。それで今年は今すぐ選挙があるということで、このタイミングでなんとか各政党に約束をさせたいということで、きのうの番組の企画となりました。

一応、番組の中では、結果がどう出るか分かり

ませんが、自民党も民主党も貧困率の調査をやるようになりました。そういうことをマニフェストの中に掲げるということ、取りあえずは約束したのです。これは恐らく、高度経済成長期以来、40年ぶりの話だと思うんです。この時、わたしは涙が出そうになりました。ずっと言ってきたにもかかわらず、ずっと無理解の中がありました。

わたしは95年からホームレス問題にかかわってきましたけど、95年に渋谷で、野宿の問題にかわり始めたときには、野宿の人は100もいなかったんですよ。だけどそれが毎年1.5倍から2倍ぐらいに増えていって、99年には600人まで増えました。わずかの間に、6倍になったんですね。

当時は、「あれは好きでやってるんだ」って言われてたんです。そして、「ほかの生活をしたくないらしい、仕事をしたくないらしい、まあ、変わった人がいたもんだね」というふうに言って片付けられてたんですね。じゃあ、4年間で働きたくない人がいきなり6倍に増えたのかと、そんなわけないだろうと思っていましたが、そういうことについて、聞く耳を持ってもらえなかったです。話をしても、マスコミの人なんかは取材にきて、「この人たちは好きでやってるんですかねえ。どうなんですかねえ」って真顔で聞かれるという状態がずっと続いていました。2000年前後ぐらいに、渋谷の駅頭、マークシティのところで、2週間に一遍ずつぐらい、野宿の人たちと飯場活動っていうのをやって、そこで、今、日本の社会はえらいことになっちゃってますというふうに訴えていたんですけど、そういうのを立ち止まって聞いてくれる人はいませんでした。そういうときがずっと続きましたから、そのときのことを考えると、ようやく日本の社会の中にこういう問題があるんだということを、世の中が向き合おうとし始めたということだと思います。そういうふうな意味で、今、転換点にきていると思います。

自己責任論の罨

これまでの考えの背景は、自己責任論がありました。わたしはこの自己責任論の話をよく、いす

取りゲームの比喩で語っていて、きょう売っていただいている、「どんとこい、貧困！」という訳の分からないタイトルの本なんですけど、その本でもその話から始めてるんです。いす取りゲームは皆さんご存じですかね。10人の人に対していすが8つあって、それで合図でいすに座ります。当然2人座れませんよね。2人座れないときに、その結果を見て、何に注目するかが問題なんだと言っています。その座れなかった人たちに目を向ければ、問いの立て方というのはどうしても、この人たちはなぜ座れなかったんだろうというふうになるんです。その原因を本人たちの中に探すと、必ず何か見つかるんです。ちゃんと音楽を聞いてなかった、機敏に動くには太りすぎていたとか、ボーッとしてるからとか、朝飯食ってこなかったからとかですね。何か必ず理由は見つかる。それは今ある結果が、なぜもっといい結果じゃないのかという問いの立て方なんです。そして、その原因はあなたにあるというふうに言えば、完ぺきな人間などいませんので、全てのことが説明できます。

例えば今、皆さんは、学生だったり、働いていたり、アルバイトしている方たちもいるでしょうが、今働いている人、今より収入が100万、200万多くないのは、どこかであんだ、怠けたからでしょうと言われたら、おれは一生に一度も怠けたことがないと言える人はいないですよ。今より貯金が500万、1,000万多くないのは、どこかで無駄遣いしたでしょうと言われたら、それもおれは一度も無駄遣いをしたことがないと言える人はいません。つまり今ある結果が、なぜもっといい結果じゃないのかということ、本人の中に探し求めていけば、すべてのことは説明できます。イチローは打率3割5分ですごいということになってますが、イチローの打率はなぜ4割じゃないのか。どこかで怠けたからですよと言えば、それも否定はできません。そういう意味で自己責任論というのは、ある意味では間違っただけではありません。すべてのことが説明できるということは、意味がないということ

す。

じゃあ、何で、そんな意味のないことを言うのかというと、それは効果があるからです。どういふ効果があるのかというと、相手を黙らせるという効果があります。

例えばわたしたちは「もやい」という団体で、相談を受けてますけど、今、ものすごい数の人が押し寄せてくるわけです。もう、きょう、あす食べていけないといって、40人ほどの人が、相談日のたびにきます。相談している間にどんどん人がたまってしまいます。狭いところですから、その待っている人が目に入るわけです。それで、この人、もうさっきから30分も40分も待ってるなどいうのを見ながら、目の前の人の相談を聞いてます。しかし、中には10分ごとに話がループしていく人とかがいるわけです。「もうその話、さっき聞きました」という感じの人です。そういうときに、話を終わらせたいと思ったらどうすればいいかということですが、案外これは簡単で、自己責任論を持ち出せばいいんです。あんたにも問題があったんじゃないですか、というと、一切心当たりのない人はいませんので、そこで黙ります。そうやって話を打ち切るのです。そのためには自己責任論を使えばいいんです。つまり自己責任論というのは相手の中に問題を閉じ込める、そういう効果があるんだということです。それはあんたの問題だと。わたしも関係ないし、社会も関係ない。おれは知らないというふうに言うために非常に便利なものです。

しかもこれは、自分に余裕がないときに使いたくなります。自分が忙しいとき、切羽詰まったとき、そういうときにもうこのことに構ってられない、そういうときについ出ます。気を付けてないとそういうふうになる傾向があります。だから自己責任論というのは、そういう意味で、人々の余裕のなさ、追い詰められ感、忙しい、そういうのを糧に、育てていくものなんです。社会はそういう意味でどんどん余裕がなくなっていて、食っていける人も、食っていけない人も、ともに余裕がなくなってきましたから、それをいわ

ば餌に、自己責任論が成長してきて、なかなかそれは根強いものだと思います。

違った目で見てみると見えるもの

だけどいすの数に注目すれば、また違った風景が見えてくるわけです。10人に対していすは8つしかないんだから、それは2人は座れないよねという話になるわけです。今回座れなかったのはこの2人だけど、もう一回やったら別の2人かもしれない。もう一回やったら別の2人かもしれない。となれば、この2人の問題じゃないということになりますよね。で、いすが8つしかない以上は、たとえ10人が全員イチローでも2人のイチローは座れない。どれだけ努力している10人であっても、2人は座れないということになりますから、それはその人たちの問題というよりは、いすの数の問題だよねということになります。だけどそういう話というのは見えないですよ。その座れなかった人に注目することが一般的な社会の中なんです。

見えなくなる貧困

きのうの番組でもちょっと話題になりましたけど、生活保護の母子加算というのは、2006年から3年かけて、今年3月末で全廃されたんです。生活保護の母子加算が削られるに至った理由は、2002年から社会保障費の自然増を抑制する政策が進められ、2002年に3,000億削ったんですね。さらに、2003年から毎年2,200億円ずつ削り、2006年の「骨太の方針2006」で、今後5年間、その路線を継続するとしました。だから5年で都合1兆1,000億削るんだということを決めたわけです。この2002年からの自然増を抑制していくプロセスの中で、いろんなものを差し出していったんですけど、その中で差し出されたものの一つが生活保護の母子加算だったんですよ。そのときに全国消費実態調査というのを基に、生活保護を受けている母子は、生活保護を受けてない母子世帯の人に比べてもらい過ぎているとしたのです。比較対照したケースは40ケースぐらいしかないのですが、

それを基にそういう結論を出して、この人たちはいっぱいもらっているのに、削っても大丈夫、死なないということで削ったわけですね。だけど今、子どもの貧困が問題になってきており、削ったことが正しかったのかということが問題になってきています。

今、母子世帯の子どもの貧困率は、母子世帯全体の子どもの66%です。つまり3人に2人の子どもが貧困なわけですね。全体の子どもの貧困率は子ども全体の14%ですから7人に1人ですね。比較すると異様に高いわけですね。異様に貧困率が高い中で、その中でも所得が低い、生活が苦しい人たちと比べてちょっともらってるからって、それを削っていいという話で良いのかとなりますし、おかしな議論であることがよくわかります。でもその削られ始めた、あるいはそのことを決めた当時は、そんなことはほとんど問題になりませんでした。子どもの貧困率なんていうことを言う人は研究者を除いてほとんどいなかったのです。日本全体の貧困の問題も言う人もいなかったのですから、こっちよりもあっちがもらいすぎだから、それは削ってもしようがないねという話が進んでしまいました。つまり世の中の目が何に向いているかによってみんなの意識が左右されていたということです。世の中の目が向いてなければ、それはどれだけあってもなかったことになる、ないことになるということです。

わたしたちのところに、ネットカフェ難民といわれる、ネットカフェで暮らしている人が相談に最初に来たのは今から6年前の2003年でした。わたしが相談を受けた中で、一番古い人では2000年からそこで生活してるという人が2人いました。だけどテレビ番組でネットカフェ難民が取り上げられて、世の中が「あらあら、ネットカフェなんかで暮らしてるやつらがいるぞ」ということで、騒ぎ出したのは2007年です。この2000年から2007年の7年間は、社会的にはいないことになっているわけですね。そんな人がいるなんて、ほとんど誰も知らなかったということです。それは現実においてもそれに目を向ける人たち、あるいは目を

向けさせる人たちがいなければ、いたことにならない。

貧困の問題というのはそういう意味で、非常に見えにくいんですね。

自分が、まあ、それなりの生活を維持できていて、家族が当たり前について、当たり前で友達について、割を食うような目にも遭わず、当たり前のように大学にいて、当たり前のように就職しました。当たり前のように結婚して、当たり前のように子どもを産みました。周りにそんな人なんかいない。見たことない。そんな人いるのか。いるとしたら、それはいろんなチャンスを自分でつぶしてきた人なんじゃないのか。だってわたしはちゃんと食ってるんだから。わたしは別に、特別な人間じゃないけど、ちゃんと食べられている、というふうになると、その人たちの問題は見えなくなっちゃうんですね。

最初に渋谷に夜回りにいったのは95年でした。今でも強烈に覚えています、大学が渋谷の近くでしたから、ちょいちょい遊びに行く街だったんですが、わたしが遊びにいらしているとき、もちろん野宿の人たちはもっと少なかったと思いますが、それでもいたはずなんですよ。でもわたしは、いるなんて思ったことがなかったのです。つまり目に入らなかったですね。だけどそれが活動としていってみると、ここにもいる、ここにも寝ているというふうにして、100人未満でしたが、それでも街の中にたくさんの野宿している人たちがいるんだというのが分かってきました。そのとき、人間って見たいものしか見ないんだなということをつくづく思いました。おそらく視界には入ってたけど、頭の中まで、脳までできてない、だから意識まで上ってないのです。そういうふうにして、いつも見過ごされるんですね。

見なくてもよかった貧困の変化

この間、アメリカの特派員の人たちと懇談する機会があって、日本のジャーナリストと話したら絶対出ない質問が出ました。それは皇室はこのことを知っているのかということなんですね。

「うーん、どうなんだろう」と思ってしまいました。

今のこの貧困の広がりや皇室は知っているのかと言われたんです。よく分かりませんが、一言えるのは、わたしは、渋谷がフィールドでしたが、代々木公園もフィールドの中でした。あそこには、わたしが活動してたとき、一番多いときで350ぐらいのテントがありました。でも時々、皇室ご一行が、何かの行事で代々木の国立競技場とかに行くんですね。そういうときには必ず道路脇のテントというのは、すべて一時的に撤去され、見えなくなる、いないことになる。それで通り過ぎたら戻していいんですね。それは上野公園も同じです。よく、皇室の方々が上野の博物館や美術館に見に行かれますが、そのときは必ず、その通るルートでテントはすべて撤去されるんですね。通過後に、また復活させて、翌日とかは戻していいわけです。ということは、多分あの人たちの視界には入ったことがないだろうと思えます。そうすると、もしかしたら本当にいないと思っているかもしれないのではと思えます。あまりそういう情報は、周りの側近の人たちも与えないでしょうから、というように話をしました。

そうやって意図的に隠されたり、あるいは視界に入っても見えなかったり、そういうことがずっとあります。だから世の中の関心はずっと低いんですね。「何それ。そんなこと、そんな人なんか、特別な話でしょう」と。

わたしたちは医療なり年金なりもっと多くの人の大きな問題をやりたいんだ、だから、あれはごく一部の人たちの問題なのだと、いつもいつも端っこにのけられる。そうだからいつもいつも見えず、そうしていつもいつも見えないから関心が高まらない、だからこっちに目を向ける人が少ない、ずっとその循環なんですね。それで端っこにやられ続けてきた、ということなんだと思います。

だけどそうしているうちに、いす取りゲームで言えば実はいすの数がどんどん減っていったんですね。いすの数が例えば正規雇用の数だとすると、非正規率は1991年は18%しかありませんでした。つまりいすは8つあったものが、非正規率が20%

になり30%になり、ついに、三分の一を超え、今は38%ですね。いすはもう6つしかなくなりました。いす取りゲームをやれば4人は座れないんです。特に、若年の人たちの非正規率は48%ですから、いすはもう5つしかない。女性の非正規率は52%で、前年に続いて非正規率は上昇しているのですから、もう、いすは5つないということです。非正規率が当たり前になっているのです。そういうふうになっても、問題の側を見ないから気付かないとか、何か普通にしてればそうならないはずだという、ずっと生き残っている理屈にすぎているのです。だけど確実に、そのいすの数が減っているのです。もう普通にしてれば、というときの「普通」の内容というのは、かつての何倍も大変になってしまっているのです。

それが今ようやく、2006年位を転機に徐々に変わってきた。それは去年の派遣切りが、一つの大きな契機になって、ようやくそっちのほうに目を向ける人たちが増えてきました。こっちの問題だという人は昔からいましたが、それがなかなか社会の大勢にならなかったということです。でもそんなのは自己責任だと言う人もいますから、この綱引きはずっと続くんです。

例えば、きのうの番組でも、傍聴席にきてくれたいろんな人たちが自分の体験を話してくれるわけです。そうするとその話を聞いて、なぜあなたはそのとき友達に相談しなかったのか、はい上がる意欲が感じられないとか、その人たちがもうちょっと頑張ればいいんだよという風に、その人たちの問題に落とし込まそうとする人はいつの時代も必ずいます。そういう人たちが多ければ、綱はそっちに引っ張られますから、それは本人の問題だと、おれたちは関係ないというふうになって、その問題が社会的な問題にならないのですが1年前に比べて、そういう意見を言う人が少なくなりましたし、また、その話にあまり引きずられなくなりました。やっぱり随分大きな変化があったということだと思います。

派遣切りが見えてきたこと

では、この変化に影響した派遣切りの問題というのはどういう問題だったかです。

大きかったのは、工場によっては8割から10割の非正規の人たちがあっさりと捨てられたということです。例えばキャノンの宇都宮工場では600人の派遣労働者、そのときは日研総業という、日本最大手の製造業の工場派遣の会社から送り込まれていた請負労働者でした。それがこの人たちはそのときは請負でしたけど、半年さかのぼれば派遣労働者でしたし、その2年前にさかのぼれば偽装請負状態でした。つまりコロコロと雇用形態を変えられてきたあげく、その人たちが今年の1月末で600人全員解雇となりました。それまでまじめに働いてきた、無遅刻無欠勤で、仕事上ミスをおかしたことがない、長く働き続けたいと思っているとか、当然そういう人たちもいるんですけど、そんなことは関係ないということがはっきりしてしまいました。本人がどれだけ勤めたいとか、そういうことは関係なく、切られるときは真っ先にバッサリと容赦なく切られる。そういう存在なんだということがはっきりしました。それまでは多様な働き方を求めているんだよ、普通にすればそんなふうに切られることはないんだよというふうに、ずっと流されてた問題が、そう言えなくなりました。それで、その人たちの生活をどうやって支えるんだというセーフティネットの問題が急浮上しました。それも社会がこのことに注目して、これは本人たちに責任のある問題ではないとしない限り、セーフティネットの問題は出てきませんから、そこが大きな転換になったということです。

去年の秋の問題で一番ひどいと思ったのは、日野自動車の話を聞いたときです。ここから遠くないところに日野の工場があります。あそこは11月上旬まで増産していました。リーマンショックが9月ですから11月増産とはいかにその経営者が、長期的な経営戦略を失っていたのかということがわかります。とにかく11月上旬まで増産し、11月上旬に正社員登用試験をやったそうです。それを当然受けた人がいるわけです。募集人数の何倍

かの人が受けて突破したのに、その受けた人たちも含めて、11月下旬に全員解雇です。あの試験はなかったことにしてくれて言われたのです。「ふざけんじゃねえ」と本人たちは思いますね。長く働いてくれますか、そういう人を求めてた、頑張っで働いてくれれば正社員登用試験もありますよ、ここをチャンスに生活を安定させていってくださいと言ってきたわけです。そう言われて採用されてたわけです。休まないでね、2カ月雇用、3カ月雇用だけど、更新があるからと言われてやってきて、それで本気になってたら、足元をすくわれるようにゴソッと捨てられた。それで頑張り続けようと思うほうが無理ですね。どんなにやっても無駄なんだといった気持ちになってしまってもおかしくない、わたしは思います。そうになると、なったほうが悪いんだと言うんだけど、じゃあ、切ったほうは悪くないのかと、いつもその綱引きの中で言い続けていかないといけないですね。

関心を持つことの大事さ

ここには福祉の勉強をされている学生さんたちも多いと思いますが、この問題というのはかなり意識的に見ようとしないと目に入ってきません。意識を向けていただきたいと思うんです。

わたしは、グリーンハウスさんという、アメリカのニューヨークタイムズで30年間労働担当の記者をやっていたという方の書いたもので、「大搾取！」という、アメリカの労働環境がこんなひどいことになっちゃってるよっていうことを書いておられる本があり、その邦訳が出ましたので、解説文を付けてほしいとのことで解説を付けたんです。そのためにその本を読んだんですけど、すごく印象深い言葉がありました。最後のほうに「見えないことは無視につながり、逆に関心は尊重につながる」という言葉があったのです。わたしはこれはすごい言葉だと思いました。わたしも似たようなことは言うてきましたが、ここまでぴちっと言ったことはありませんでした。やっぱり見えなければ無視につながっていくし、関心を向けるっていうことは、やっぱりその実体を知ってい

くっていうことであり、その実体を知っていくっていうことは、そこで生きてきた、今たとえうまくいなくなっているとしても、その人の何十年かの人生とか、いろいろな不利を被ってきた人生とか、それでも何度も頑張ろうとして、でも痛めつけられてきた経緯とか、そういうことに目が向くようになるということですね。そのことがその人たちの人生への関心につながるようになるのです。

野宿の人を見て、「なに昼間からごろごろしていやがるんだ」というのは簡単なんです。でも当たり前ですけど、その人たちもこの間まで仕事をしてきた。じゃあ、何でそうなっちゃったのか。あるいは昼間ごろごろしてるかもしれませんが、夜中ずっとアルミ缶を集めるために仕事してるとか。そういうことはこの問題に関心向けなければ分からない。知ろうとしなければ分からないですね。まずは関心を向けることが重要なんです。そうするとそこから、その人たち、あるいはその状況を尊重していくところまでは、ある程度進んでいけます。これはわたしの体験でもあります。やっぱり野宿の問題をやり始めるようになって、それがどういう状態なのか、どういう生活なのか、あるいはまあいの中で野宿の人たちに限らず貧困状態の人たちの話を聞くようになって、一体何があったのかということ、何か少しずつ知ることになっていったし、それはその人たちが少なくとも、普通のわたしたちと同じくらいの努力はしてきていると思えました。もちろん完璧ではありません。完璧な人間はいませんから。でもほどほどにまじめで、でもほどほどにいいかげん。世の中にはほどほどにまじめで、ほどほどにいいかげんで、でも食えている人と、ほどほどにまじめで、ほどほどにいいかげんで、でも食えなくなっちゃってという人と、基本的にはこの2種類なんだということが分かります。ただ一般的なにはなかなかそう言ってもらえないんですね。食えている人はそれなりに努力してきた人。食えなくなっちゃった人は努力しなかった人とされます。生活保護なんかを受けるに至った人は、努力する気持

ちのなかった人だ、甘えようという気持ちの強い人というふうに言われてしまいますが、実体はそんなことじゃないというのが、やっぱり分かってきます。そういうのは、何か、結果だけ見て上っ面だけなぞって、人の人生をなめたことを言っているということが分かってくるんですね。そのスタートラインは、そういうことに、やっぱり関心に向けることだと思うんですね。

その意味で、これはわたしは前から言っていることですが、やっぱり貧困の最大の敵は無関心なんだと思います。日本社会はそのことに関心に向けてなかったですから、ここまで貧困が広がってしまったと思います。それは単にわたしは政治が悪い、企業が悪いでは済まないだろうと思います。やっぱりわたしたちの市民社会の責任ということも、同時に併せ考えないといけないだろうと思っています。そのことをどう社会全体として転換できるかということが、やっぱり今、問われているんだと思います。

滑り台社会のこわさ

わたしは今の社会は滑り台社会だと言っています。今言ったような、貧困が広がるような状況が社会的に存在してるんだという、そういうことですね。それはどういうことかという、図1 (P.19参照) に書いてあるように、左側の斜めの線が滑り台で、四角に×点を付けているもの、それが本来なら利いているはずの歯止めです。この四角に書いてあるようなものがきちんと利いていれば、人はいろんなトラブルがあってもコロコロとは落ちていかないんです。だけどそれがちゃんと利いてないから、コロコロと落ちてくる人は増えるんだということを言っています。

考えてみれば、働かざるもの食うべからずと、あっさり言われますけど、人生80年あれば、少なくとも15歳までの義務教育期間があり、それから65歳以降の高齢期、都合30年間、人生の4割近くは働いていないことになります。

働かない者は食べられないというなら何十年も過去にさかのぼらなければなりません。そういう

ことではない世の中にしようということやってきたわけです。働かなくても食べていける、そういう社会にしてきた。じゃあ、働いている間は、そこの原理は貫徹されるのかというと、それもそうじゃない。50年の人生には病気もするし怪我もする。子どもを産めばその直前直後は働けないし、子どもが小さいときは育児に手が掛かるから、その間も働けません。かつては、怪我して病気になったら、破産しました。それは仕方ないとされてきました。そこで、そうならないように医療保険制度を作り、子どもを産むときは無収入になって、お金がなくなりましたということにならないように、産休制度を作り、育児休暇を作りました。また失業したら路頭に迷ってホームレスにならないようにと失業保険を作りましたというふうになってきたんです。人生の中に必ずトラブルはありますが、そのトラブルがあっても生活が大波にのみこまれないように、そのトラブルと生活を切り離す仕組み、それがここで言う歯止めですけど、その歯止めを作ってきました。そのためには長い歴史があったし、お金も掛かったし、大変な苦労があったと思います。それがだんだん利かなくなってきたということなんです。

一番目にある子どもの貧困については、山野さんが詳しくお話しされると思うので、わたしは飛ばしますが、そういうところで抱えた不利益が、例えば大学の進学率なんかにそのまま反映するわけですね。そうすると労働市場の周辺にしかかかざるを得ないので、非正規労働とか、あるいは正規であっても、「なんちゃって正社員」とか、「名ばかり管理職」とか、周辺の正社員が増えていきますから、そちらにあっさり排除されやすくなります。そうすると雇用保険を受けられたのかという話になります。これは3月にILOの報告書で雇用保険でカバーされているのは、失業者全体の23%だと示していますから、77%は制度から漏れてしまっているのです。社会保障としてはもらえないのが当たり前のはずですが、10人に2人しか対応してもらえてないんです。生活保護についてはいろんな学者さんの試算で、該当者の大体10人の

中の2人から4人しか受けられてないだろうということですから、6人から8人は漏れてることになります。つまり、トラブルがあったときに支えてもらえないというほうが普通だということになっています。ここに書いていませんが、踏ん張っているのが「こけた」というものもあります。

多くの人たちの貧困が、こういう状態でも一気に社会化しないのは、それでも家族が抱えているからです。

例えば今の労働市場、一方に超長時間労働で働いている中核的な正社員、あるいは周辺の正社員とか非正規でも長時間労働をやっている人たちがいて、他方で労働時間が短くて、働いても食べていけないという人たちが増えていて。こんな状況をわたしは過労死か貧困かという、そういう究極の二者択一を迫られる人が増えていていいと思います。これはわたしだけが言っていることではなく、政府の就業行動基本調査でも指摘しています。週当たり60時間以上就業の人と30時間未満就業の人が増えてるんですね。労働時間を縦に棒グラフで並べると、一番短い人と一番長い人の、この両極が増えていて、政府も二極化の傾向が見られますというふうに言っています。そういう状態が広がっています。では昔はそうじゃなかったのかというと、昔からそうだったんです。過労死が問題になったのはもう70年代ですから、昔から企業の中核的な人たちというのは超長時間労働は当たり前だったんです。

他方で主に女性たちはというと、最低賃金に張り付くようなパート労働でしたから、その生活だけではとても1人ではやっていけない。そういう状態で貧困化したのです。

過労死か貧困かという状態は昔からある。だけどその2人が夫婦になるので、そこで何か問題が見えなくなっただけなんです。だから女性たちはずっと低い労働条件のままに据え置かれ、DVを受けて死にそうな目にあっても離婚できない。離婚したら食えなくなるからです。そういう中で問題がずっと家族の中に閉じ込められ、深刻化し、死ぬ目に遭ってもまだそれでも出ていかれ

ないという状態の人が、今でも少なからずいるわけです。

その状態の女性のパート労働の低賃金に引きずられるようにして、男性たちが貧困化してきました。非正規の労働条件がどんどん切り下がり、派遣労働はこの10年間、平均時給は一度たりとも上がったことはなく、下がり続けです。そういう労働条件に引っ張られるようにして下がり、今度は非正規の底値が下がっていくと、正規のほうも下がっていく。同じ職場で同じ仕事をしながら、こっちは時給は800円だよと。あんた、何で2倍も3倍ももらってるのという話になりますから。そういう中でどんどん下がっていく。今度は正規が下がっていったら、正規もこんな低賃金で頑張ってるのに、なに、非正規のくせに甘えたことを言ってるのという話になって、またさらにそっちが下がる。ずっとそうやって下げ合う、下げ合戦が続いてきたんです。

貧困が何をもたらすのか

そういう中で貧困が進んでくるわけですが、多くの人はそれでも家族が頑張ってるので、ある意味では貧困というのはまだ完全には社会化されてないということになるわけです。だけどそれでよかったねという話では済まないだろうと、わたしは言っています。そもそも無理があるところを抱えているんです。ということは、ずっと矛盾が煮詰まっていくということになります。

例えば30代ぐらいで、うつ的な傾向を持っている人が時々わたしたちのところへ相談に来ます。今までも働いてきたし、これからも働きたい。働けないわけじゃない。だけど調子の悪いときはどうしても朝起きられない。仕事でミスをしてしまう。そうなるが続けられない。で、家にいる時間が増える。そうなる親が理解してくれないから、おまえ、何やってるんだと言われる。将来のことを考えているのか、どうするんだと突きつけてくる、詰め寄ってくることになります。こうした対応はうつ病にとってマイナスですから、どん

どん追い詰められて、もっと具合が悪くなる。なんとか出ていきたいけど出るお金はない。だからしょうがない、家にいる。なんとか顔を合わせないで摩擦を少なくしようと、精いっぱい努力をしている。けどこっちは失業して24時間家にいる。親はもう定年退職して24時間家にいる。これでは顔を合わせないわけにはいかない。合わせればいがみ合いだ。もう耐えられない。何かいい方法はないか。そういう相談をしてくるんです。しかし出られないんだから抱え込まざるを得ないですね。そういう中で家族の溝が、一気に煮詰まっています。そういう中で事件が起こるといっわけです。

親が子どもをどうにかしてしまおう、子どもが親をどうにかしてしまおう。そうすると世の中的にはとんでもない親がいたもんだ、とんでもない子どもがいたもんだ、家族の愛情が薄れてきているみたいな話になりますが、わたしは、何でそこまで家族が煮詰まらなきゃいけないのかという問いを立てなきゃいけないだろうと思います。家族っていうのは私的な設定になってきてますから、強い家族もあれば弱い家族もあるわけです。当たり前ですが、余裕のある家族もあれば余裕のない家族もありますが、公的なセーフティネットが機能していないのでは、どうしたって問題を抱え込まざるを得なくなってきていますね。

今回の製造業派遣の非正規切りで職を失った人は、20数万人だといっています。その8割から9割の人は自宅に戻ることで、あるいは実家に帰ることで今の状況をなんとかしのいでますね。つまり家族が抱えているわけです。でもその状態が長期化していけば、家族は煮詰まってきます。そういう中で事件が起きる。でも家族が抱えてたら、貧困って社会的に見えないので、なんとかなるという話になってしまい、その問題が顕在化しないのです。貧困問題としては顕在化せず、事件として顕在化するから、さっき言ったような形で処理される。そこで処理されて、その本当の問題というのは、結局は明るみに出ない。これは今、親子関係で言いましたが、児童虐待とか、あるいは老

老介護による虐待とか、基本的には同じ問題だろうとわたしは思います。でもそれも世の中の人が、その問題を見ようとしなければ、結局とんでもない親だとか、とんでもない子どもだとかで片付けられてしまい次々と事件が起こってきます。家族の愛情が足りないから道德教育を復活させなければと、とんでもない方向の解決策が出てきて、全然話が違う方向に流れてしまい、一向に事件は絶えない。そうなれば、また道德教育を強化しなくちゃいけないということになり、堂々めぐりの悪循環のサイクルにはまります。

貧困による4つの選択肢

良くも悪くも、そこでなんとか家族が抱えているのが実体ですけど、家族が抱える力というのも世帯主収入にかかわってきますから、今、労働条件がどんどん悪くなっている以上は、家族の抱える力というのも弱くなってきます。そうなるとどうしても、そこに抱え込まれない人たちが増えてきますから、その人たちは貧困として社会化されてきます。では、この人たちはどうやって生きていけばいいのかということですが、基本的にわたしは選択肢は4つしかないと言ってますね。

まず1つは自殺です。基本的に「もうこの世の中で生きていてもいいことがないや」というふうに思うに至るわけです。だから自分で命を絶つということです。11年連続、3万人を超える自殺が続いています。自殺発表を渋々渋々していた警察庁が、さすがに今年に入ってから毎月自殺者統計を出すようになって、大体毎月、今、3,000人のペースで自殺していることが明らかになっています。つまり1日100件、100人が自殺しています。今、わたしの話を始めてから1時間たちました。1日100人ということは1時間当たり4人ですから、この話の間に4人がどこかで自殺をしています。

この数というのは人口比で見ると世界第8位です。日本より自殺率の高い国は、リトアニア、ガイアナ、ベラルーシ、ロシア、ハンガリー、ウズベキスタン、カザフスタンです。これらは旧ソ連

圏の国々で、ソ連崩壊の中で独立した国で経済的には決して豊かではなく、非常に厳しい状態が続いています。しかも緯度がとても高いというのが共通点です。だから冬が長く、しかも冬の間は夜が長い。そういう国です。その次に日本がきてるんです。世界第2位とか第5位とかの経済大国で、気候はといたら温暖湿潤である、世界的に見ても極めて暮らしやすいところです。どういうことかということ、経済的な要件とか気候要件以外の要件が、いかに悪いかということです。いかに生きづらいかということです。われわれはそういう社会で暮らしているわけですから、わたしは今の社会で生きていて生きづらいという人を、おかしいと思わないですね。当たり前だと。あなたは世界的に見て非常に生きづらい国に暮らしてるんだというふうに思います。むしろ今の日本社会で生きていて、生きづらさを全く感じないという人のほうが心配になります。

2つ目はというと、犯罪です。

例えば3月に対応した人は36歳でした。もともとご実家が酪農をやっており、もう牛乳を作れば作るほど赤字がかさんじゃうということで、事業をたたんで一家離散になったそうです。それで自分は派遣労働に入って、3年間に3カ所ほどで、ほぼ途切れなくまじめに働いてきましたが、去年の11月に派遣切りにあって放り出されたのです。仕事を失ってから放り出されるまで、わずか10日でした。しかし放り出されても帰る家もない。仕事も見つからないという中で、離職票が発行されないため雇用保険も受けられず、とうとうお金がなくなってしまいました。生活保護はというと、そういう状態になれば、いざとなれば使えるよということを、36年間の人生の中で誰からも聞いたことがないので、思ったことがない。そういう中で生活できなくなって行って、背に腹は換えられず、闇サイトにアクセスして、偽造の運転免許証を預かって、「おまえ、これで携帯電話買ってこい」と言われて、携帯電話を買いにいったら、一発でばれてパクられて逮捕されました。結局、3カ月拘留されて、3年の執行猶予が付いた有罪判決を受

けて出てきた。そういう人でした。

これで36歳の前科者の出来上がりです。彼は非常にまじめな人でしたけど、これからの人生はますます大変になる。もうちょっと早く、誰かがそこまでいく前に、どこかが彼の生活を立て直せるようにしていたら、彼の生活ももっと将来的にいろんな選択肢が増えたわけですが、そういうふうにはしてくれなかった。そういう場所もなかった。それで世の中はますます大変になる。ますます負担が増える方向を選んでいるんですね。そういう人たちが必然的に増えている。でも、自殺とか犯罪というのは口で言うほど簡単ではありませんから、多くの人はそのままだ野宿状態になります。ここで家族が抱えてくれれば良いのですが、それができなければどうしようもない、これが3つ目になります。

4つ目が、この図1（P.19参照）の右下のほうに書いた「NOと言えない労働者」だということです。これはどういうことかという、例えば派遣村にきたような人たちです。職もない、家もない、お金もない。食っていけないという人々です。そこで、それは甘えに甘えている、探せば仕事はあるはずだろう、何とかしてみせろと言われるわけです。じゃあ、頑張って自分でやってみましょうとなりますが、どういう仕事ならアクセスできるのかという話です。それは必然的に寮付き日払いの仕事になるわけです。月給仕事は最初の給料が入るまで一月とか、一月半とか、場合によっては二月とかかかりますから、飲まず食わずで1カ月も2カ月も働けるわけがないので、最初の給料が入るまで生活費がもたないわけで、そういう仕事はそもそもアクセス可能じゃないわけです。

ハローワークには月給仕事しか置いてませんから、そうするとハローワークにいても意味がないと、いかなくなります。いったって自分がアクセスできる仕事はそこにはないんです。だけど事情を知らない人たちはまた、「こいつら、職がないって言いながら、ハローワークにもいかないぞ。働く気がないんだな」って言うわけです。就労意欲とは関係ないのに、そういうふうにもた言われ

てしまい、結果的にスポーツ新聞とか、そういうもので寮付き日払いの仕事を探すしかなくなる。でも寮付き日払いの仕事というのは、昔は飯場労働が典型的でしたけど、一般的に考えて、労働条件は劣悪なものが多いのです。普通の人は寮付き日払いの仕事など探しません。今、ハローワークには長蛇の列ができてますが、多くの人は、求人票を見て、この会社はどれぐらい信用できて、大きくて倒れなさそうなのか。業種は何で、職種は何なのか。自分ができそうなのか。雇用保険にちゃんと入っているのか。給料を幾らくれるのか。自分の通える場所に職場があるのか。親の介護とか子育てと両立できる勤務時間帯なのか。そういうことを見て、仕事を探すんですね。それが当たり前です。だけど普通の人がこだわるようなそういう条件には一切こだわらなくて、寮付き日払いの仕事を探すしかない。そうすると、その普通の人があるような条件にはNOと言えない。どんな条件であってもそれをのむしかない。という人になるので、それをNOと言えない労働者だと、わたしは言ってるんです。

そうするとNOと言えない労働者が、貧困の増加により社会の中に増えてきます。社会の中にNOと言えない労働者増えると何が起るかというと、労働条件が壊れていくんです。

何でかといえば、低賃金でも働くなっていうやつはいくらでもいるんだ、日給1万も1万2千円も欲しいなんて、何、ぜいたく言ってるんだという話になりますから、低賃金にどんどんなっていく。うちはなんとか高い賃金出してあげたいんだけど、周りがどんどん価格競争で安くしているので、高い賃金なんか払ってたら会社がもたない。ごめんねということで、その賃金も安くなっていく。そうやって下げ合い合戦が勃発するのです。

貧困というのは労働市場が壊れて、セーフティネットが利いてないことによって増えていくのですが、貧困が増えるとNOと言えない労働者が増えます。それはセーフティネットが利いてないからです。それによってまた、労働市場は壊れていきます。つまり貧困というのは労働市場が壊れた

結果であると同時に、労働市場を壊す原因でもある。結果であり原因であるということは問題が循環してるということです。労働市場が壊れる、貧困が増える、NOと言えない労働者が増える、それによってさらに労働市場が壊れる、さらに貧困が増える、さらにNOと言えない労働者が増える、それによってさらに労働市場が壊れるということです。これをわたしは貧困スパイラルと呼んでます。こういうことの中で日本社会は十数年きたんだと思ってます。だからずっと下げ止まらない、いつまでたっても、らせんを描いて下がり続けていくんです。そういう状態にはまり込んだんだというふうに思っています。

貧困のスパイラルとは

これは別の角度から言うと、派遣村にたどり着いたり、あるいはわれわれのところ相談にくるような、きょう、あす、生きていけないという人たちの問題と、さまざまな労働市場の中の職場の労働条件というのは、これはコインの裏表の問題なんだということです。無関係の問題ではなく、貧困スパイラルとしてつながっている問題だということです。このことを、新幹線の清掃をしているおばさんたちを例にとって説明すると分りやすいです。わたしは最近移動が多いので、よく新幹線に乗ります。東京駅で待っていると、乗客を吐き出した後に、ピンクの制服をきた清掃のおばさんたちが、車内清掃をしていくんです。あれを見ていて、清掃の女性たちを取り巻く労働条件ってどうなっているんだろうと考えるわけですね。どんどん新幹線の本数は増えてますから、仕事の量は増えているんです。だけど飛行機との価格競争とかがあって、簡単に運賃を上げられませんから、人件費は上げられないということです。そこでどうなるかという、労働強化になるんです。今まで10分かけて3両掃除してくださいと言われていたのが、今度から9分でやってくださいと。申し訳ないけど、そうしないと次の発車に間に合わないという話になってくる。となると、今まで歩きながら掃除していたものが、ちょっと走らないと

間に合わなくなってくるということになる。となると、その清掃のおばさんたちの中には、例えば中にはちょっとひざが痛いおばさんとかがいるとすると、走らないといけないとなると、ちょっともたつくようになってきます。今まで周りの人たちは、それが分かっていたら、それなりにフォローができていたけれども、その人たち自身が、もう走らないと終わらなくなってくるから、もうフォローができなくなってくる。フォローができなくなると、その人の仕事の遅れというのが余計に目立つ。余計に目立つようになると、周りの人の目が厳しくなる。「あんたがもたもたしてるから終わらないじゃない。同じ給料をもらってるんだからちゃんとしてよ」「あんたが終わらなかつたら、みんなのせいにされるでしょう」という話になって、周囲からいじめられるようになる。解雇されなくても、そうやって居たたまれなくなつて辞めるかもしれないですね。

その人は職場からそうやってはじかれても、労働市場ではこう言われるわけですよ。「あんた、働けないんですか」と。「ちょっとひざが痛いだけなんですよ」と。「甘えるんじゃないよ」と。「みんな大変なんだよ」と。「死に物狂いになれば何とかなるでしょう」と。「頑張りなさいよ」と言われて、そこからもはじかれるんですね。

食っていけなくなりますから、当然ですが、最終的にはNOと言えない労働者になるしかありません。「わたしはこんなにひざが痛くて、まともにも働けない。半人前ですが、どんな仕事でもやります。食っていけないので、頼むから仕事をください」。こういう人になって労働市場に帰ってくる。その存在がまた労働条件全体を引き下げる。本人はただ生きていきたいだけなのに。そういうサイクルができてしまいます。

今、新幹線の清掃のおばさんの話で言いましたが、あらゆる職場が今そうなっていると思っ

ているんですね。介護の現場、福祉の現場、医療の現場を取ってみても、介護報酬はさすがに今度は上げるという話になりましたけど、どんどん報酬が下がって

く中で、お金が少なくなっているもんですから、そういう中で、さあ、誰が率先して犠牲になって泣くって話にはならないわけです。そうすると、その職場の中で一番弱い人から切られていくんですね。そして、だんだん少人数でやっていくことになるから、みんなだんだん忙しくなっていくって、周囲をフォローする余裕がなくなる。

わたしたちも同じです。「もやい」もさっき言ったような状態で、てんやわんやになって、野戦病院のようだとされる、そういう状態になってますから、余裕がないんですね。昔だったらというほど昔じゃないですが、毎週3時間のミーティングを持つんですけど、そのときにそれぞれの自分の抱えている難しい問題について話をし、そうすると先輩とかが、「いや、それはこうしたらいいんじゃないの」とか、「以前、こうやったらうまくいったよ」とか、「こういう社会資源がある。ここに相談してみたらどうだ」とか、そういうノウハウとか心構えとかを提供したりできてた。そこで1人で抱え込まなくても、それなりにみんなと相談しながらやっていけるという雰囲気が、多少なりともあったんですけど、あまりにも相談が多過ぎて、今はもうそういう時間を持ってなくなってきてます。そうすると、もうみんな一人ひとりが抱えている件数が多過ぎるので、抱えているケースの報告をすると、それだけで3時間終わってしまい、もう会議の時間は持てない。しかも、そういう話し合う時間がないために、新しいボランティアの人が右も左も分からないままにケースをずっと抱え込まなきゃいけない。みんな、とてもじゃないけど忙しそうなので、申し訳ないから聞けない、質問できないとなる。そうすると、こっちも忙しいので、同じ話を2回も3回も聞く人があると、「さっき言ったでしょう」みたいな感じの対応になってしまう。そういう中で、「ああ、わたし、ここにいても役に立たないんだ」とか、「いてもしょうがないんだ」といった感じになって、こなくなる人が出てきました。それはよほど気を付けないと、そうなるんだと思うんですね。そういう状態があらゆる職場で出ると思うんです。そ

うなると排除される人が増えてくる。で、その人たちが貧困になる。で、NOと言えない労働者になる。またそれが職場を締め付けていく。そのサイクルなんですよ。

どうすれば貧困に立ち向かえるのか

だから貧困の問題というのはそういう意味で言えば、あの野宿している人たち、あるいは派遣村にきた人たち、今、もやいに相談にきている人たちの問題ではないということですね。さっきも言ったように社会全体の形の問題ですから、そういう中で増え続けていくんですね。これを変えないといけないということになる。ここで図2(P.19参照)を見て下さい。右側にギザギザの線が入ってますね。これは、階段のつもりです。滑り台から落ちて、それで逆から駆け上ってみるといって、駆け上れる人は10人に1人とか、2人はいるかもしれない。だけどそれは普通の人の解決にはならない。普通の人の解決にならない解決策は解決策とは言えない。なので、普通の人が上れるような階段を作ればいいんだということで、滑り台に階段を付けた。これが、わたしたちが普段やっていることです。で、その階段というのは、この四角で囲ったようなものです。

こういうことを、さまざまな制度を活用してやることで、例えば生活保護を受けてアパートに入る。そうすればその人たちが、例えば、ハローワークにいて仕事を探せるようになるわけなんですよ。今、派遣村の人たちは生活保護を受けてアパートに入ることによって、ハローワークで仕事を探しているんです。皆さん苦戦してますけど、少なくともハローワークにいて仕事を探せるようにはなったという感じです。今まで寮付き住み込みの仕事をやるとする以外、選択肢がなかった。それが今度は通いの仕事を探せるようになったんですね。でも労働市場はボロボロですから、皆さん、非常に苦勞されてます。

この間、造園の仕事に就きたいということで、造園業の面接にいった人が、面接でこう言われたそうです。「うちは残業はあるけど残業代はない

よ」、つまり「残業代は付かないけど残業はあるよ」と言われた。「えっ」っていう顔をしちゃった。そしたら返事はこなかった。ああいう顔をしちゃいけないんだっていうのは、彼の反省の仕方ですけれど、残業代を払わないのは違法です。でも、それでも社会全体が落ち込んでいますから、残業代払わなくてもやりますっていう人がたくさんいるので、そういう人には回ってこないです。そうやって労働条件はボロボロになっていくんです。だからそうやって生活できるようになっても、労働市場がしっかりしないと、結局はまた同じサイクルにはまり込んでいきますから、労働市場の中も強めていかないといけないんだということになります。そういうことを通じて、人々の生きる「溜め」を増やしていく。それが活動なんだというふうに、わたしは思っています。

「溜め」のない社会をどうするのか

「溜め」というのは、わたしの考えた概念ですが、貧困というのは溜めがないという状態なんだということです。溜めって何かというと、お金がない、それは金銭的な溜めがないということです。あるいは人間関係が乏しい、これは人間関係の溜めがないということです。それからその結果として精神的な余裕がない、自信が持てない、「どうせ」と思ってしまう、そういう意味で精神的な溜めがない。そういういろんな意味での溜めが、総合的に失われる状態だというふうになります。何を言いたいかというと、溜めのない人に頑張れというだけでは意味がないんですね。頑張れなくなるのは溜めがないということですから、頑張れる条件を作らないといけないということです。

人間はどんな条件にも慣れる、どんな状況にも慣れるもんです。野宿の生活をしている人で、よくテレビとかで「おれはこういう生活が性に合っているんだ」と言っている人を見たことはありませんか。あれはうそをついているわけじゃない。その人の本心なんですけど、そのときの状況に応じた本心だということなんです。野宿しながら野宿を脱却するルートがない中で、「野宿はつらい。

なんとかしないと」と毎晩毎晩思ってたなら、数カ月で人間の精神というのは破綻します。だからどこかでその状況と折り合いを付けるしかない。もっと大きな家に住みたい、もっといい車を取り回したい、そんなことを毎日毎日考えてたら、どこかでおかしくなっちゃうから、どこかで、わたしはこれでいいやと、ささやかだけどこれがわたしの幸せというところで落ち着くわけです。現状と折り合いをつけるわけです。そうしないと人間の精神のバランスは保てませんから。それと同じで、どれだけ現状が非人間的であっても、ネットカフェで毎晩、背中丸めて寝る生活でも、その生活をずっと続けてれば腰がおかしくなりますが、そういう生活でもしょうがないとどこかで受け入れていかないと、自分が壊れてしまいます。それでそういう気持ちになっていくんです。

そのときに大事なのは、夢を持って、どんな状況でも希望を捨てるなということではないんです。それは本人を追い詰めることにしかならない。そうじゃなくて、そういう条件を社会的に作ること、頑張ろうと思えるような条件を作ることだと思います。それが、わたしの言葉で言うと、活動なんです。だから、それには2つのことが必要だと言っています。1つはきちんと生活保障をすることです。現実生きていけること、生きていける状態にすることですね。3食食える、寝場所がある、服も着替えられる、風呂にも入れる、そういう状態を作るです。もう一つはやっぱり居場所が必要だということです。生活保護を受けたから友達ができるわけではありません。自分の状況を話せる、できる限り同じ状況の人たちと話せるのが理想ですが、そういう状態で、自分が受け入れられる場所があることが大事です。自分に野宿経験がある話しても、「何だ、おまえ」とばかにされない、その2つがあって、初めて人間の溜めというのは増えてくるんだというふうに、わたしは言っています。

これは別に、野宿の人とか、派遣村にたどり着いたような人たちだけの問題ではないんです。日本社会全体に、そういう溜めがなくなっています。

そういう溜めがなくなっているから、貧困が増える。職場もそういう場所じゃなくなってきた。学校もそういう場所じゃなくなってきた。家庭もそういう場所じゃなくなってきた。地域もそういう場所じゃなくなってきた。そういう中で、社会の溜めがなくなってるから、はじかれて溜めのない人たちが増えてきてるんです。それは社会の自己回復の過程なんだということなんです。そういう意味でも貧困の問題というのは、あの人たちの問題ではないということになります。そのためにわたしたちがどれだけ自分たちの社会を健全にしていけるか、その指標が貧困だということになるんだと思います。そこにちゃんと立ち向かえない社会というのは、やっぱり病んだ社会なんです。生きづらい社会ということになります。だからわたしたちの社会そのものを生きやすくしていくために、その問題に取り組む必要があるんだと、わたしは思っています。

そういうふうにして、きちんと貧困に立ち向かえる社会、それが認められる社会、小さい問題だから放っとけというふうにはばかにしない、侮らない、向き合える、そういう社会がわたしは立派で強い、頼もしい社会だと思うんですね。都合の悪いことから目をそらしたいですね。それは人間で言ってみれば分かりやすいですね。都合が悪いことにもちゃんと立ち向かえる。それが立派な人だということになる。社会も同じだと思います。今まではずっと自己責任論で問題を流してきました。ホームレスもフリーターも給食費の払えない親も、特別な人として誰も彼もそういう問題として流してきたんです。そうやってその問題から結果的には逃げ回ってたんですね。目を向けないで逃げ回ってました。けどもう逃げ回るのはやめませんか。ちゃんと立ち向かえる社会、そういう意味で、われわれは貧困問題から逃げませんよと、ちゃんと受け止めますよと、どんとこいと言える社会にしましょうということを最後に言って、わたしの話を終わりたいと思います。ありがとうございました。

(文責 学会事務局)

図1

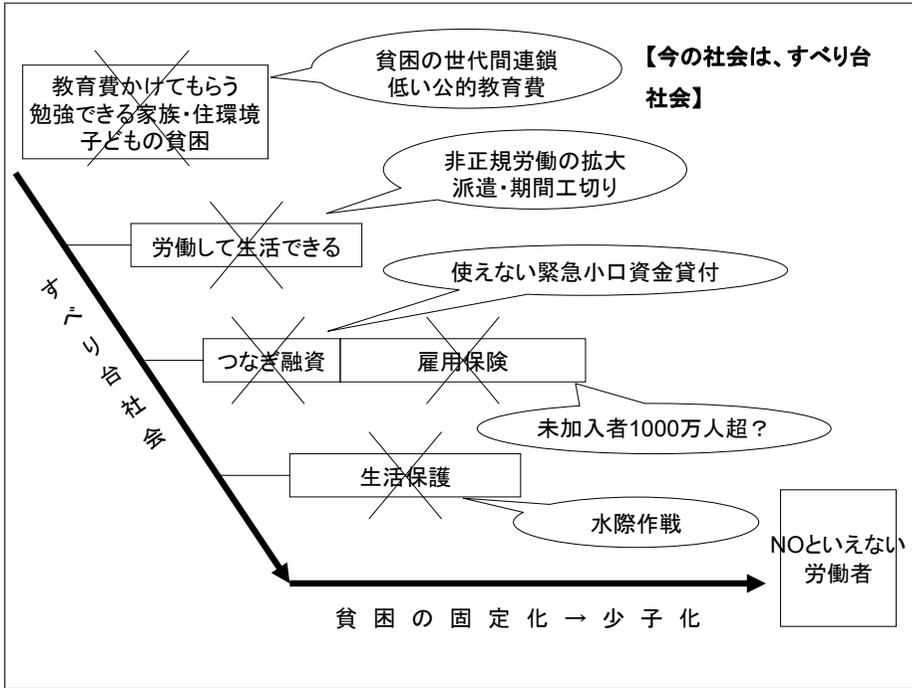


図2

